

1999年度 第1回バレーボール学会研究集会報告

1. はじめに

1999年度第1回バレーボール研究集会が、平成11年7月17日(土)14時30分より、筑波大学 附属高等学校体育館アリーナ及び体育講義室で行われた。今回のテーマは「(ソフト)バレーボールの小学校での実践研究」であった。今回の研究集会に参加した立場から、その概要を報告したい。

2. 研究集会プログラム

- 1) 会長挨拶
- 2) 「教科体育に(ソフト)バレーボールを採用した経過および背景」
永島 惇正 (東京学芸大学教授)
- 3) 「(ソフト)バレーボールにおけるゲームの実践指導法」
浜崎 順子 (京都教育大学附属桃山小学校教諭)
(実技モデル: 目黒区立東山小学校児童)
- 4) 「(ソフト)バレーボールのゲームおよびディスカッション」
浜崎 順子

司会: 福原 祐三、篠村 朋樹

3. 研究集会概要

はじめに、栃堀申二会長からあいさつがあり、その中で日本のバレーボール導入時期から近年のソフトバレーボール普及までの概略説明があった後、永島氏発表によるシンポジウムに移った。

永島氏は、小学校学習指導要領等にバレーボールが採用されてきた歴史的経過を踏まえながら、平成10年の小学校学習指導要領に「ソフトバレーボール」が採用された経緯についての説明があった。また「バレーボールの教材化」という場合に2つの見解があること、すなわち、小学校教材にバレーボールを取り入れてもらうというバレーボール協会側からの見方と、小学校教材として相応しいようにバレーボールを作り変えるという教科教育的な見方があることについて述べた。さらに、ゲームにこそ多くの学びの内容が含まれると考えられるため、ゲームがすぐ出来るよう

なければならないことを強調した。

続いて体育館アリーナに移動し、浜崎氏の実践指導法に移った。目黒区立東山小学校児童24

名に対して50分程の公開授業。講師紹介の後、ソフトバレーボールは初めてという児童を前に浜

崎氏は、心を通い合わせることの大切さについて話をし、そのためにチームで声をかけ合うこと、ま

た、自分たちで主体的に学習するために記録用紙に記入させること、挨拶をきちんとすること等に

ついて話した後、4人一組のチーム別活動、そして簡単なルール説明をしてゲームへと授業は進ん

でいった。

ゲームでは最初100グラムのボールを使用していたが、初めてということもあってなかなかラリー

が続かず、サーブミスも多いゲーム状況が見られた。と、すかさず浜崎氏はボールを50グラムの

ものに変え、サーブは入るまで何回でもOKにルール変更、ボールの受け方についてのアドバイス

も付け加えた。すると次第にラリーが続くようになり、後半のゲームでは3段攻撃に近い形も見られ

るようになった。授業終了後には子供たちから、「もっとやりたーい！」という声が体育館に響き、そ

の後の参加者によるゲームは予定を変更して子供たちと一緒にやることになった。

最後に篠村氏司会によるディスカッションが行われた。フロアからの質問に浜崎・永島両氏が答え

る形で進められた。主な質問とコメントは以下の通り。

Q. ゲームと基本との関連についてどのように考えるか？

A. あくまでもゲームを中心とし、ゲームをしていく中で自然に技術の向上意欲を自ら持つようになる
と考える。

Q. ひざ当てはやはり付けた方がいいか？

A. 滑り込んでボールを取るようになる、またそういう気持ちになる等の効果があり、実際にも付けな

い時とはラリーの続き方が全然違うようだ。

Q. 一般に普及しているゴム製のソフトバレーボールと比較して今回の軽いボールは授業教材として

どうか？

A. 従来のゴム製のソフトバレーボールでは小学生には難しすぎて授業教材としては困難である。

単元6-10時間でバレーボールの楽しさを教えるためには軽くて扱いやすいボールから始める方が好ましい。基本的なボール扱いに時間をとられない分だけ戦術にすぐ入っていける。

4. おわりに

今回の参加者は40名程度であったが、シンポジウムあり、公開授業あり、ゲーム体験ありで非常に充実した内容であった。ソフトバレーボールの用具も各メーカーから発売されている様々な材質、大きさ、重さのボールやネット等が数多く展示され、今までのソフトバレーボールについてのイメージを大きく変えさせられた参加者も多かったのではないかと思う。これら様々な種類のボールや多様なルールでプレイヤーのレベルや特性、嗜好に合わせて柔軟に展開されるソフトバレーボールは、上から一方的に決められ(あるいは変更され)たルールの下で厳密に行われ、競技人口減少の途にある現在の6人制バレーボールとは極めて好対照な存在であると強く感じた今回の研究集会であった。